

2013年度活動報告

- 定期総会 2013年4月27日(土) 日仏会館 501 会議室
- 講演会 2013年4月27日(土) 日仏会館 501 号会議室
テーマ:「19世紀演劇 ミュッセの詩学——生誕200年記念国際シンポジウムを中心に ミュッセ断想」
講演者: 鹿瀬颯枝 (聖学院大学教授)
- 出版物
「コレクション 現代フランス語圏演劇」
01. エメ・セゼール『クリストフ王の悲劇』(6月刊行)
06. ヴァレール・ノヴァリナ『紅の起源』(5月刊行)
07. エンゾ・コルマン『天使たちの反乱／フィフティ・フィフティ』(5月刊行)
12. マリ・ンディアイ『パパも食べなくちゃ』(6月刊行)
- 会報 復刊04号 (2013年4月25日発行)
- 講演会 2014年3月3日(月) 早稲田大学6号館318教室 (演劇博物館レクチャールーム)
テーマ:「パトリス・シェロー演出のラシーヌ悲劇『フェードル』における剣」
講演者: ジル・ドゥクレール (パリ第三大学教授)
共催: 早稲田大学演劇映像学連携研究拠点、京都造形芸術大学
- 講演会 2014年3月5日(水) 専修大学神田キャンパス7号館764教室
テーマ:「フランスの最新舞台事情——鳴海康平氏に聞く」
講演者: 鳴海康平 (津あけぼの座芸術監督、第七劇場主宰、演出家)
聞き手: 横山義志 (SPAC 静岡県舞台芸術センター 文芸部、学習院大学非常勤講師)

編集後記

ほんと慢性的な気候不順続きで、薫風の候などといえるものはもうなく、冬が過ぎたらしいと思ったら夏日と梅雨の訪れでやれやれだが、まあ天気の話ほど無芸なものはなく、こればかりは喧嘩を売るのも不可、そんななかでこつこつ進めた会報第五号の仕上がりだ。毎号似たことをしている気もする、今回は刊行が予定より一カ月は遅れた。というのも、総会がすでにもたれ、協会は14年度に入っているのだ。少々報告を兼ねて書いておく。総会は恙なく終了したが、小さくはない案件があった。前年予告されていた役員の変替、長く会長の重責を担われてきた渡邊守章氏を名誉会長に、副会長であった伊藤洋氏を新会長に、副会長として野村万作氏を再選、事務局長だった小生が伊藤先生の後任副会長に、事務局長に根岸徹郎氏が決定をみた。日仏演劇協会の新たな陣容である。なんといっても、渡邊旧会長にご苦労さま、そして今後もよき指導をお願いしますと述べよう。ちなみに、会報今号はとくに若い世代を中心に原稿が多く、正直なところ予算超過が心配だが(全部に眼を通したわたしの責任で頂いたものはすべて掲載した)、とりあえず慶賀なことと思う(もちろん執筆者の全員が会員というわけではないにしろ)。こうしてみると、名誉会長、会長から、稿を寄せてくれた若い諸君まで、当協会はこぶりながら多士済々と自画自賛したくなる。今後もこの態勢が継続できることを編集部として期待する。もっとも、研究や表現に歳はなんら関係ないのだから、伊藤新会長のもとでみなそれぞれ自力を発揮すべし、徹底的に思考してその自力というやつを一段も二段もアップしようというのが掛け声(!?)であるべきかもしれない。それがわたし個人にもフィットする。その意味において、会報は大事なメディアであり、この寸法でも質は落とさないようにするので、是非読まれ、意見や注文があれば頂きたい。やや爺ムサク聞こえるかもしれぬ発言だが、会報はひとつの関門であると同時に開かれてもいることはご承知を。今号はここで。いかにもすっきりしない候で、「厭な感じ」のひっきりなしだ、時代劇もどきの台詞ながら、各人ご自愛、奮闘召されよ。(S)